



防衛研究所

The National Institute for Defense Studies

中露共同飛行：軍事面での一体化が進行

地域研究部中国研究室 岩本 広志

NIDS コメンタリー

第 252 号 2023 年 1 月 10 日

2022 年 11 月 30 日、中国及びロシアの爆撃機による長距離にわたる共同飛行が確認された。同様の飛行の確認は今回で 5 回目である。筆者は、本年 5 月に第 4 回目の飛行が確認された際、同様の飛行が「定例化」されたことについて説明するとともに、過去の長距離共同飛行の実績と中国側の発表内容等を踏まえ、今回は、同一年内で複数回実施の初めての例になる可能性がある旨を指摘した¹。今後の資となるよう、本稿でも、過去との比較と中国側の発表内容について確認して論考したい。

実施時期等

中国とロシアによる我が国周辺での長距離共同飛行は 2019 年の初確認以降、今回で 5 回目である。それらを簡単にまとめたのが下の表である。

期 日	機種等	備 考
2019年 7月23日 (火)	中 国 H-6 爆撃機 2 機 ロシア Tu-95 爆撃機 2 機	同時期にロシア A-50 早期警戒管制機 1 機が竹島領空を侵犯
2020年12月22日 (火)	中 国 H-6 爆撃機 4 機 ロシア Tu-95 爆撃機 2 機	
2021年11月19日 (金)	中 国 H-6 爆撃機 2 機 ロシア Tu-95 爆撃機 2 機	
2022年 5月24日 (火)	中 国 H-6 爆撃機 2 機 ロシア Tu-95 爆撃機 2 機	左記中国の H-6 爆撃機 2 機は途中で、新たに飛来した別の中国の H-6 爆撃機 2 機（推定）と交代 また、同日、ロシアの IL-20 情報収集機 1 機が北海道礼文島沖～能登半島沖の公海上を飛行
2022年11月30日 (水)	中 国 H-6 爆撃機 2 機 ロシア Tu-95 爆撃機 2 機	東シナ海を飛行する際、中国の戦闘機（推定）2 機、太平洋進出時にも中国の戦闘機（J-16 と推定）2 機が合流

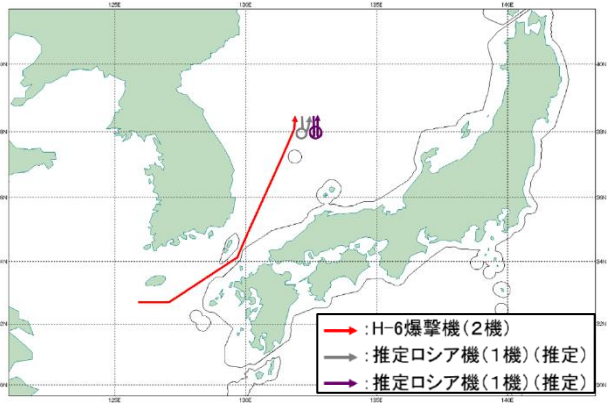
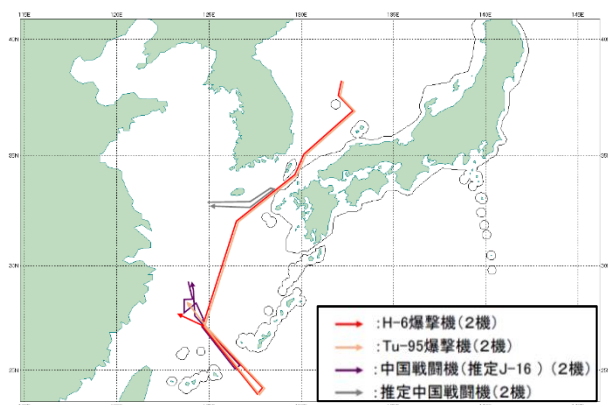
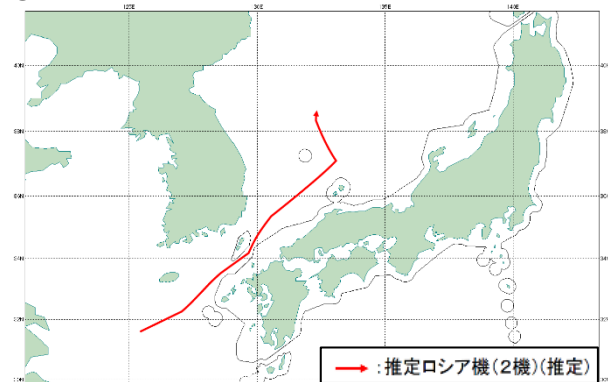
出所：統合幕僚監部 HP より作成

4 回の飛行までは、同一年内で行われたものはなかったが、間隔が概ね 1 年半、1 年、半年と短くなってきており、今回は初めて同一年内に複数回実施の事例となった。時期の特性として、前回の 4 回目は、QUAD 首脳会合が開催されている最中に行われたが、今回は大きな政治日程に合わせることはなかった。

¹ NIDS コメンタリー第 231 号、<http://www.nids.mod.go.jp/publication/commentary/pdf/commentary231.pdf>

今回の活動の内容

統合幕僚監部によると、2022 年 11 月 30 日（水）午後、中国の爆撃機（H-6）2機及びロシアの爆撃機（TU-95）×2機が、我が国周辺において長距離にわたる共同飛行を実施したことが確認された。当該活動に前後して、関連するとみられる航空機の活動も公表されており、以下のようにまとめられる。

航跡等	行動等 ※括弧は推定
<p>① 午前</p>  <p> → : H-6爆撃機(2機) → : 推定ロシア機(1機)(推定) → : 推定ロシア機(1機)(推定) </p>	<p>中国 H-6×2 が東シナ海～対馬海峡～日本海に進出、北進し大陸方面へ飛行</p> <p>同時刻頃、(ロシア機×2)が日本海を南進後、反転、北進し大陸方面へ飛行</p>
<p>② 午後</p>  <p> → : H-6爆撃機(2機) → : Tu-95爆撃機(2機) → : 中国戦闘機(推定J-16)(2機) → : 推定中国戦闘機(2機) </p>	<p>中国 H-6×2 及びロシア Tu-95×2 が日本海～東シナ海～太平洋にかけての長距離にわたる共同飛行を実施</p> <p>上記爆撃機が東シナ海を飛行する際、(中国の戦闘機)×2 が合流していたほか、当該爆撃機が太平洋に進出する際にも、中国の戦闘機 (J-16) ×2 機が合流し太平洋に進出</p>
<p>③ 夜</p>  <p> → : 推定ロシア機(2機)(推定) </p>	<p>(ロシア Tu-95×2) が、東シナ海～対馬海峡を通過し日本海に進出後、北進し大陸方面へ飛行</p>

出所：統合幕僚監部 HP より作成

当該活動について、松野官房長官は翌 12 月 1 日の記者会見で、「我が国に対する示威行動を明確に意

図したものであり、我が国の安全保障上、重大な懸念」であるとし、中露両国に対し「重大な懸念」を伝達したことを明らかにした。同会見では、今回の共同飛行に関連し、中国機がロシア国内の飛行場に、ロシア機が中国国内の飛行場に、それぞれ初めて着陸した旨も言及されている。相互に着陸したことと、表にまとめた活動が一連のものとして行われていたとすれば、下記の要領であったものと推察される。

- ①ロシア方面に飛行する中国爆撃機をロシア機がエスコートしてロシアの飛行場に着陸、給油等
- ②中露の爆撃機が同時にロシアから発進して日本周辺を飛行し、中国の飛行場に着陸、給油等（この際、中国の戦闘機がエスコートを実施）
- ③ロシアの爆撃機が中国から発進してロシアへ帰投

今回を含め、同様の飛行の際は竹島周辺も飛行している。竹島は周知のとおり、韓国による不法占拠が続いている、我が国固有の領土である。日米韓 3 か国は地域の平和と安定に関して共通の利益を有していることから、安全保障上の連携に支障が生じることは望ましいことではない。同飛行は、日米韓の足並みを乱す狙いが込められていないだろうか。また今回は、双方の戦闘機の活動も同時に確認されていることも注目される点である。

中国国防部の発表

今回の飛行当日 18:02（日本時間）付で国防部 HP に掲載された記事は、前回の飛行の時と同じ内容であり、異なる点は日時のみだった。即ち、「中露両軍の年度軍事協力計画に基づき、11月30日、両国空軍は、日本海、東シナ海、西太平洋海域上空において、定例の共同空中戦略パトロールを実施」のみである。前回 4 回目の発表以降、3 回目までにあった「第三者に向けたものではない」等もなく、飛行の事実関係を伝えるのみになっており「淡々と実施した」という姿勢を感じさせる内容となっている。なお今回は発表までの時刻が早まっている（4 回目は日本時間午前から午後にかけて行われた飛行を 20:07（日本時間）で掲載）。今回は、飛行の実施後に即発表というように、より整齊と行われたことを示唆している。

結論

今回、双方の戦闘機の活動が確認されたほか、共に相手国内に着陸するなど、内容に進展がみられるが、そのことが中国の公的メディアで大々的に報じられているわけではない。ただ、これまで行われてきた同様の飛行後の報道姿勢も今回と大差があるものでもない。中露の連携を誇示したいのであれば、中国は各メディア等を動員して喧伝することは容易なはずだが、そういったことは行われていないのである。2022年2月4日に行われた中露首脳会談後の共同声明では、「中露の友好に上限はなく、協力を聖域はない」とされていたが、ウクライナ侵攻前のことである。ウクライナ侵攻により国際的な批判を受けるロシアと同一視されることを避けるために、軍事的な協力関係を強調しすぎることのないよう配慮している可能性も考えられるが、活動の内容には着実な深化がみられるのである。

今回のことで、当該活動が定例化されていることが証明されたといえる。更に、中露が軍事面で実効的に一体化を進めていることも見て取れる。また、日米韓の連携を損なうことを狙っていることさえ考えられる。我が国は、中露が軍事的に一体となって迫ってくるという、極めて厳しい局面に立たされている。

（2022年12月8日脱稿）

プロフィール

profile

地域研究部

中国研究室

3等陸佐 岩本 広志

専門分野：中国の軍事動向、総体的国家安全観

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>